通信
支部
同舟
第23号
12月
12月7日編集発行
東京都宅地建物取引業協会府中支部
編集兼発行人 高野豊次

十二月分定例理事会開催

とき　十二月六日午後四時より
ところ　ダイワ不動産
出席者　山村、結城、辻、内山、槇峠、平井、五島、長島、粟山の諸氏

要領次の通り

一、協議又は伝達事項

(イ) 三多摩連絡協議会忘年会について
当支部より二・三名出席の要あるも期日未定

(ロ) 本部厚生部の保険組合設立について
先に用紙配付ずみの右基礎調査書を十二月十日迄に提出を要するにつき期限を厳守せられ度い

(ハ) 取引業者票について
本部製作にかゝる取引業者票十四枚割当てあり一枚五百円につき希望者は支部へ申込まれたし。

(ニ) 名刺印刷引受けについて
表面に協会マークを金文字で刻み、裏面に協会の性格等を印刷したるもの紙・印刷費共百枚六百拾円で希望者は支部に申込まれたい。

(ホ) 無免許営業者調査報告について
右用紙を本部より交付されたので各会員で心当りのむきは支部長宛報告願いたい。

(ヘ) 虚礼廃止について
業協会員は年末年始の虚礼を廃止する（年賀状を含む）ことに決定した。

(ト) 協会本部移転
業協会本部は今般　新宿西口第一富士ビル（緑屋のならび）に移転した。
尚昭和四十一年二月よりは同所において相談部を開設の予定である。

(チ) 各種用紙について
免許申請用紙は支部に備付けてあるので入用者は申込まれたい。一部六十円
又契約書等　用紙も遂次本部で作成、支部で販売の予定である。

(リ) 業協会会員名簿について
近く各員にもれなく配付の予定

(ヌ) 業者実態調査について
これについてはしばしば通報するところなるも当支部は明年早々、実施の見込につき各員遺漏なきを期せられたい。

人と店

京王線府中駅大踏切り近くに株式会社えびすや不動産がある。

社長は結城等君で本年五十九才京都の生れだが幼少の頃北海道に渡り　中学は札幌・高専は官立蔵前工の精密機械科である。

修学後一時小学校教員などしたことがあるが富士電機に就職、ついで東京航機に転職した同社では課長。工場長などを経て、取締役に累進、大いに将来を嘱望された。

然るにたまたま工員募集の為、広島市に出張の折あの名状しがたい原爆に遭遇し、思いがけない負傷をした。終戦後は香港電子公司の技術部長として迎えられ、再起を期したが、再び原爆の病のおかすところとなり帰国を余儀なくされた。

尤も悪い時には悪いこと続きで帰国してみると先に入手した・千葉の土地が悪徳不動産屋の為に詐欺苦茶にされておるのを嘆き、一念起つて日本不動産学校に学び、昭和三十七年より斯業の信義明朗を目ざして業界に精進することになつた。

技術屋のせいか、至つて無口だが度胸と信念の人で、昨年練馬に出張所を置いてからは特に、練馬人に信用を獲得、多数の斡旋を委ねられ、現在はむしろ本店を凌駕する収入源をつくつている。

店員は五名、家庭は夫人のみで子供はない、尚、同君は府中市に於ける原爆被害者の府中会長をつとめおり、特に最近では被爆者の援護の趣旨から一円運動を展開しておるので大方諸彦の心ある協力を願つて止まない。以て切なる自重と自愛を望む。

還流

不景気だ、仕事がない、ついよからぬことをする。それが不動産業者の代名詞であるが如く、尤も東京都だけでも吾々正規の業者が一万以上もあるのだから若干くずの出るのは当然で、百人が百人完璧とはいいがたいのはどの社会でも通用することである。

それが特に不動産業のみに強く当る所以のものは、従来のやり方に大きな欠陥があり目から鼻へ抜ける様な実績があつたからにほかならない。

現在の正規業者なら決して、指弾を受ける様なことはないと考えるが、ごく一部の者がもぐり業者と取りくんで萬に一つの悪事を働くことが不動産業者全般の悪評となることはまことに遺憾である。

然し、こゝ当分は何と弁明しようと依然不動産業者は悪評をこうむることとは必定で各自のたゆまなき自律自戒と信義誠実の業務を遂行することによりやがては遠からず霧の如く消えこの悪評も耳にすることはなくなるであろう。

その時こそ吾々の天下であり吾々が真の紳士となるときである。

消息

○ 武蔵野商事八王子市に進出

武蔵野商事は今次省線八王子駅南口に店舗を持ち不動産業の外小鳥、熱帯魚、生花等を販売する。

電話は〇四二六三　六六四一番で

十二月八日開店する

○ 日本相互住宅および田中商事は当支部を脱会したので名簿より削除した。

一口随想

鎮守の森といえば大体杉の木の森が想像せられる事実杉の木は常緑で長命し大木となるので、神厳を保つ上からも昔から鎮守の森には杉の木が植えられたものである。

ところで地元大国魂神社の神域にある杉の木は樹令の如何にかゝわらずすべて立ち枯れして、いささかどころか大いに、神厳さを欠いている、むしろ欅の大木が落葉こそすれ同社の神域にはふさわしい感じさえする。然らば二百年も三百年も長命したあの杉の木がどうして、一木も残さず見事立ち枯れしたのであるか、一般の人は割合に無関心である。

筆者はある日つぶさに立ち枯れの状態を調査して見たがこれは特に杉を好む木喰虫が樹皮と木質部の間にくい入り、樹液を吸い取つたからで、今少し立ち枯れが少数の内にこの被害木を切つて皮はぎ、それを焼却するときはいきおい害虫の駆除となり斯くも蔓延しなかつたと思うが何さま神木のこととて容易に伐採もせず放任しておいたのが遂に全木に亘つて被害が漫延したもので実に惜しいとも何んとも言い難いものがある。

編集後記

○十二月六日の支部理事会は本部報道部会と重復し出席出来なかつたことは遺憾である。

○今度の報道部会では物件の交流研究会があつたが現在交流をやりつつある各支部の説明を聞いてなる程とうなづいた。

○当支部の物件の交流については同舟創刊当初より目論見しておつたことであるが僅かに一回だけ物件の交流があつただけで、その後交流の申出でが絶えてしまつた。

○要は会員各位がその腹にならぬと如何ともしがたく笛ふけど踊らないのでは仕方ない。

○不景気、不景気といわれるがどうやらやつておるところをみると本当の不振でない様に思われ、物件交流といつてももつと不振にならないとついてこない様な気がする。

昭和四十年十二月七日夜　　高野